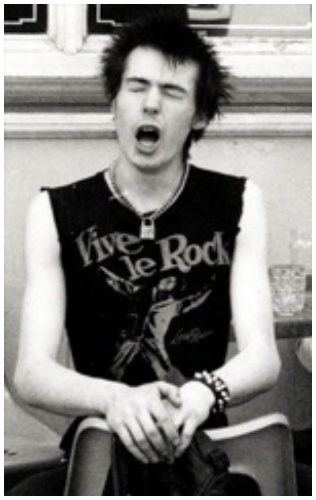
　わたしがこんなダメダメなのは、きっとキッカケも原因もない。きっと、カスだからだと想う。
　顔が醜くて特技もなく、小さな声でしか話せない自分が、集団においてもっともカス扱いされることはよくよくわかっている。
　わたしはこれから、カスのままで生きていかなくてはいけない。なぐられても蹴られても、だれにも必要とされなくても。
　―――なんで、わたしロックなんて聴いてたんだろう。
　カス扱いされない人間の聴く音楽に成り下がってしまった音楽。愛されたり努力が実ったり、あるいは自由なくハジけて楽しい時間を送れたりする種類の人間のための音楽じゃないか――――
　そう気づいた瞬間、わたしは読んでいたロッキング・オン・ジャパンをコンクリートの地面に打ち付けていた。同時にラジオ本体も地面に叩きつけた。イヤホンを耳に突っこんだまま、ラジオ本体をひたすら。
　音楽誌によくでる「中高生に人気」らしいバンドがラジオで喋っている。プロモーションでわたしの住んでいる県にいま来ているらしい。
　「ほんと今回は、良いメロディーが浮かんできたと思っていて。今回はそれに呼ばれるように歌詞もすらすら出てきたんですよ。ぼくらはメロディーを大事にしているんで！」
　……。
　「アハハッ！この曲、うちのパワープッシュにしたいくらい！初めて聴いたとき、ほんとにメロディーがいいなと思いました」
　……。
　「ありがとうございます！ 」
　……。
　「ソングライティングも、アレンジのアイディアや音色のセンスにしても、純粋にいままでで最もいいものが生まれたなと思いました」
　「そうですね、すごくいいのが書けたとおもいます。さらに今回は、遊び心のあるものに仕上がったとおも――――」
　大きなノイズが何度か耳にはしり、やがて流れていた音は消えた。静寂が残る。

　風が吹いて、仰向けに寝ころんだわたしの胸からチョークがふんわりと舞った。耳からイヤホンを抜き、粉の軌跡を目で追う。灰色ののっぺりとした雲をいつまでも見ていた。

↓

神聖かまってちゃんと踊りたくない人々

―――いつもいつも奪われるわたしたちの絶望



　セックスピストルズのジョニー・ロットンが「ロックは死んだ」と云ってからはや３０年以上が経った。ロックの息の根を止めたバンドが現れたと思えばロックは息を吹き返す。これこそロックの形であると従来のバンドの形を引き継ぐようなバンドが現れればロックはたちまち力を失って死んでいく。

　なんど死んでいるんだ、っていうくらいロックは死んでいる。もう死ねばいいんです。

　死のう。死んで消えてなくなろう。このまま惨めなまま生きるのは辛いだろう？ そんなとき「ボンクラよーちゅっと辛いよなあおれたちって…」といってくれるものがロックだった。

　それはもう昔の話。

　さよならBAY BAY。もう会いたくないね。ロックは生き方を教えてくれるものだった。しかし、いまロックはライブの現場で楽しまなくてはいけないものに成り下がってしまった。ロックはクズである。だから成り下がってもいい。しかし、こう、いまのロックやロックシーンに感じるのはアッパーさだ。

　ロックはダウナーなにんげんのためのものだろう。ただアッパーさを求めるならバカである。いや、ロックはバカだ。バカでいいのだ。しかし、こう、アッパーさだけに傾倒していればそれはマジで知能指数が低いサルである。それじゃあダメだ。

フェスには現在、サルばかり集まっている。男ザルや女ザル。屋台ザルやクソファッショんザル。じつにいろんなサルがいるので、サル学者はここに来るのが一番いいと思われる。
アッパーになるために来て、ツイッターでそれを発する。もうほんとどーでもいい。死んでほしい。童貞は考える。DO亭！ドッテイ！ドーッテイッ！
われわれボンクラにとってロックは大切なものだった。それがアチラ側のにんげんに奪われた。それが悔しい。

たとえば、『ジョジョの奇妙な冒険』というマンガがある。週刊少年ジャンプで連載されていた。気持ち悪い絵柄で評判だった。それが昨今、アメトークで話題にされたせいなのか、「ジョジョっていいよねー」とアッパーなにんげんたちから評価されているのだ。

いままで「ジョジョ？ 変なタイトル。絵、気持ち悪るぅーうぇ〜…」といってきたアッパーなにんげんたちが今、手のひらをヒョイと返した。「ジョジョって面白いよね」「かっこいいよね」「アーティスティックだよね」とかなんとか。わたしたちだけがほんとうの面白さを理解しているんだという自意識が踏みにじられる瞬間である。やつらはあたかも自分たちがそれを最初に評価したかのように振る舞う。わたしたちがクズなりにせっせと背負っていたものをやつらはなんの悪びれもなく奪っていく。奪っていくという意識すらもない。ただ奪っていく。わたしたちへの尊敬の念がない。なくてもいいけど、すこしは悪びれてもいいんではないか。

わたしたちボンクラがせっせと水を撒いてきた大地をやつらは一瞬で根こそぎむしりとる。そして何かが流行ってるとしればウンコまみれにして次の街に出かける。ナタデココ→ティラミス→パンケーキ→ポップコーン のバカみたいな流行をみていればやつらの悪びれなさと自覚のなさと無能さがよくわかる。
そういった意味でもう、ジョジョはもうわたしたちのものではなくなった。

そんなふうにロックはわたしたちのものではなくなった。バンドはアッパーなものを演奏するし、リスナーもアッパーなものをはやくくれよとフェスなど現場でせまってくる。もういやだ。わたしはダンサーではないので、ロックで「踊れ」といわれても「はぁ…はあ…？」となってしまう。わたしはダンサーではないので、ロックで踊りたいわけではない。

身体が勝手に動けばそれはすばらしいが、踊ろうぜといわれてしまうと途端にシラけてしまう。その点、クロマニヨンズはライブでそのような発言をしないのですばらしい。動かないきみがおらがだいすきだといわれているような感じがする。

神聖かまってちゃんは踊る踊らない楽しむ楽しまないの範囲にいないバンドだ。かれらはロックにいちばん必要な魂を燃焼させることをやっている。それはアチラ側のにんげんではできない。われわれにしかできないことである。

なかでもの子の姿や楽曲は生き方を教えてくれる。神聖かまってちゃんがいまロックシーンにいなかったらと考えるとゾッとする。かれらが楽曲でしめす絶望がなければ生きてないにんげんがたくさんいたに違いない。生きているかもしれないが「ただ生きてるだけ」であっただろうし、生きているけど呼吸できなくて窒息寸前であったかもしれない。
一方、踊るだの楽しむだのなんだのいうバンドが何個か消えたところで影響はない。そんなに踊らせたいなら『らんま２分１』のＯＰでも演奏したらいいのである。

絶望がない曲なんてクソくらえだ。
↓

うおお←

奥付

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ